

# 叡山文庫真如藏『十講卷釈』翻刻

— 付・安居院流唱導研究史小考（その一） —

大島 薫

一、「安居院流唱導」の始祖と「説法道」

『平家物語』諸本の一つに数えられる『源平盛衰記』巻第三には、承安四年（一一七四）五月に営まれた最勝講をめぐむ一話が記されている。

今年ノ春ノ比ヨリ天下旱魃シテ、夏ノ半ニ至リ江河流止リケレバ、土民耕作ノ煩ヲ嘆、国土農業ノ勤ヲ廢ス。井水絶ニケレバ、泉ヲ掘テゾ、人ハ集ケル。清涼殿ニシテ恒例ノ最勝講被<sub>レ</sub>始行。五月廿四日ハ、開白也。二十五日ハ、第二日也。朝座ノ導師ハ、興福寺権少僧都覺長、夕座ハ山門ノ権少僧都澄憲、々々天下ノ旱魃ヲ嘆、勸農ノ廢退ヲ憂テ、啓白ニ言ヲ尽シ、龍神ニ理ヲ責テ、雨ヲ祈乞給ケリ『源平盛衰記』には、右に引用した箇所が続けて、安居院澄

憲が啓白（表白）した「説法詞」を記録し、澄憲が祈雨を果たした効験によつて勸賞に預かった顚末を記す。本話は、澄憲が権大僧都に勸賞された経緯を史実に基づいて語るもので、九条兼実の日記『玉葉』ほか多くの記録に伝えられている。澄憲が啓白した「説法詞」も、醍醐寺藏『表白集』に「最勝講第四座啓白詞 但除釈經之詞」と題して収録される（後藤丹治『戦記物語の研究』筑波書店、一九三六）ほか、少なからざるテクストに確認することができる。ただし『玉葉』は、この勸賞をめぐつて次のように伝えている。

或人云、今度勸賞等事、法皇不許之、執柄強之云々  
澄憲を権大僧都に勸賞することに、後白河法皇は難色を示したが、関白藤原基房（松殿）が強行したというのである。最勝講は法勝寺御八講・仙洞最勝講とともに「三講」と称せられ、

「玉体安穩、宝祚延長」などといった言辞に象徴される、天皇や国家の安泰を祈願するために営まれた公的法会であつた。この時期、「三講」の講師に勤仕することは僧綱補任の要件とされており、この講師が勧賞に預かつた事例も多かつた。また承安四年には、祈雨を果たした効験によつて、醍醐寺や東寺の密教僧が勧賞されている。後白河法皇が澄憲を勧賞することに積極的でなかつたのは、いかなる所以であつたのだろうか。『玉葉』には、関白（松殿基房）と余（九条兼実）の言を伝えて、

関白又被語余云、啻非感說法之優美、被尊祈請之効験也、則是炎旱性涉旬、民戸有愁、仍祈以請雨、蓋是御願之趣也、昨日祈申此趣、言泉如涌、聞者莫不動心情、自曉天果以降雨、故有此寂感者也者、余云、有先例哉、関白云、依說法雖有勸賞之例、不被仰勸賞、無御感之例、今度可無勸賞哉者、余云、唯不堪說法之優美、猶有不次之朝恩、何況今已有祈雨之靈験、何無其賞哉者、関白諾

と記されてもいる。松殿基房が、澄憲の說法を「啻に說法のを感じるのみならず、祈請の効験を尊ばるるなり」と評価したことは注目されよう。真言宗小野流の開祖である仁海が請雨經法をよくして「雨僧正」と称されたことは周知だが、仁海以後も請雨・祈雨を果たすべく、東密を修する僧は孔雀經御説經や請

雨經法など行い、その効験は僧綱補任の要件とされていた。が、承安四年の最勝講において、澄憲が祈雨を果たしたのは、竜神を感應せしむる「說法詞」によつてである。仏法擁護の誓願を違えたゆえと責め立てたのである。『源平盛衰記』には「啓白ニ言ヲ尽シ、龍神ニ理ヲ責テ、雨ヲ祈乞給ケリ」と記されている。また「理」により責め立てた弁舌に、龍神が感應したことを加えるべく、

龍神道理ニセメラレ、天地感應シテ、陰雲忽ニ引覆、大雨頻ニ下ケリ

と記されてもいる。龍神の感應は、澄憲の「詞」によつてもたらされ、その巧みなる弁舌ゆえに得られたのである。降雨に至つたとはいえ、読經や修法と同様に、その効験を認めるべきであるかが躊躇われたとしても首肯される。が、澄憲は勧賞された。この勧賞を経て說法は、読經や修法と同様に効験あるものと公認されたわけである。（この詳細については、拙稿「安居院澄憲の〈說法〉——承安四年宮中勝講における勧賞をめぐる」『仏教文学』二十四号、平成十二年に、すでに述べたところである）

安居院澄憲は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した天台僧である。諸記録によつて、同時代の人々から「富楼

那尊者の再誕」と称され、「説法の手」の名声を欲しいままにしたことが知られる。しかし、承安四年の最勝講における顛末には、読経や修法と同様に効験を現すものと、説法について認識されていなかった事情を読み解かせる。澄憲以前にも「説法優美」の文言をもって称讃された学侶は数多く存在したし、もちろん平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて「説法の手」と謳われたのも澄憲だけでなかった。そして、そういった学侶が勧賞に預かる事例も少なくなかったのである。しかし澄憲は自ら得意とし、称讃を博された説法によって、祈雨の効験を認められたのである。龍神を感応せしめた「説法詞」は、後白河法皇に召し上げられることとなる。

最勝講啓白詞、謹以令注進候、一驚寂聞忽蒙異賞、再及観現、一道之光栄、万代之美 談也。骨縫埋龍門之士、名宜留風闕之雲、喜懼之至、啓而有余而也、澄憲恐懼謹言記録化した「説法詞」に添えられた「注進文」には、澄憲の口吻を伝えて余りある文言が綴られている。説法、さらにいえば説法において表白された「詞」に、読経や修法と同様の効験が公認されたことは、澄憲が説法を一道とすべく「説法道」を提唱し、「説法道」に辿る先哲と、自らが作文した「説法詞」の記録とテキスト化に向かう契機となったと考える。そして

「説法詞」を類聚し編纂する作業は、澄憲の真弟子である聖覚へと引き継がれる。後に「安居院流唱導」と称される説法（唱導）の一流は、こうした経緯をもって誕生するのである。そして現在まで連なる、「安居院流唱導」を伝えるテキスト（説法資料）の流伝がはじまるのである。

## 二、研究史概観

日本において編纂された説法資料は、仏教史学あるいは仏教教学においてでなく、おもに日本文学の形成を説き明かすべく研究されてきた。「唱導文学」の語を始めて使用したのは折口信夫だが、折口は「唱導文学」（『折口信夫全集四』所収、初出は『日本文学講座二』、一九三四）に、

唱導文学は、説経文学を意味しなければならぬのであるが、わが国民族文学の上には、特に説経と称するものがあり、又其が唱導文学の最大なる部分にもなつてゐる。だが、その語自身、あまり特殊な宗教―仏教―的主題を含んでゐる為、其便利な用語例を避けて、わざわざ、選んだ字面であつた（中略）宗教以前から、その以後までを包含してゐる訣なのだ。殊に民俗文学の発生を説く事に力を入れたい、

と言ふ私自身の好みからは、是非とも此点を明らかにしておかうと考へる。さうして同時に、「非文学」及び「文学」を伝承、諷誦する事によつて、除々に文学を發生させ、而も此同じ動向を以て、文学を崩壊させて行く、団体の宗教的な運動を中心として見ると謂つたところを、放さないで行きたいものである

と述べ、「唱導文学序説」(前掲書所収、未発表原稿)にも、独自の文学觀を盛り込んで次のように定義した。

唱導といふのは、元、寺家の用語である。私の此方面に關心を持ち出したのも、実はさうした側の殊に近代に倚つての、布教者の漂遊を主題としてゐた(中略)唱導文学とは、宗教文学であると共に、宣教の爲の方便の文学であり、又単に一地方の爲のみではなく、広い教化を目的とするものである。ある宣布を終へた地方から、未教化の土地へ向けて、無終に展べられて行く事を考へてゐる者でなくてはならない。だから当然、旅行的な文学である

そして折口の「唱導文学(文芸)」観は、筑土鈴寛に継承される。筑土は「唱導文学」の範圍を具体化しつつ、民俗学的方法を用いて解説を進める一方、梁慧皎撰『高僧伝』をはじめとする文献資料に依拠した考察を行った。「唱導と本地文学と」(

『筑土鈴寛著作集第三卷』所収、初出は『国語と国文学』七八と九、一九、一九三〇)には、その冒頭に、

齋会の後中宵に至つて、一座疲労倦怠あるを以て、別に宿徳を請じ、唱名読誦の外に因縁譬喩を交へた話をする。夫が唱導だと宋高僧伝唱導の科に云つてゐる。唱導は説經、談義と同じだ。表白もその中に含まれる。この唱導には二様の方法があつたやうに思ふ。自分一個では、仮に表白体の唱導、口頭の唱導とに区別してゐる。即ち前なるは雜筆体の修辭法によつて製作される成文である。綺麗彫華、文藻横逸したるものを以て可しとする。勝れた唱導師の持つ詞章は後々襲用され、書留められて、説經模範書と云つたやうなものになる。表白体の唱導とても、全く成文に依つてなしたとも云切れぬであらう。或は機に臨んでは、頓作口辞も必要であつて、表白秀句にも勝つたのが飛出したかも知れぬ

述べるほか、元亨二年(一三二二)に虎閑師鍊が編纂した『元亨釈書』巻第二九「志三 音藝志七 唱導」から、唱導が「学修・度受・諸宗・会儀・封職・寺像・音藝・拾遺・黜争・序説」のうち「音藝志」に採り上げられた、その実態を、

説經師は諂諛交々生じ、変態百出、身首を揺し、音韻を腕

にし、人心を感じしむるに自ら泣き、詐偽俳優の伎をなす  
実以て痛むべきことと、師鍊をして歎息せしめ

と読み解き、澄憲に始まる「安居院」に加えて「三井寺に寛元  
の比（13世紀半ば頃）定円があり又一流をなして」、鎌倉時  
代末期には、唱導の「二家」と認識されていたことを指摘した。  
筑土は『言泉集』『澄憲作文集』『唱導鈔』など「安居院流唱導」  
を伝える説法資料を採り上げ、澄憲・聖覚父子の事跡に及ぶな  
ど、他に先駆けて「安居院流唱導」の研究に着手したのである。  
またさらに、安居院以前の説法を伝える『法華修法一百座聞書  
抄』を読解して、説法のうちでも經典解釈を講説する段（経釈）  
の構造を、

説経は元来経の講説がその規範となつてゐるやうだ。先づ  
経名の解題より始め、経の来歴を講じ、内容に入つての判釈  
がある。八講とか最勝講とかはこの形式であるが、大安寺  
百座放談などは此型が骨子となつてゐる説経のよい標本で  
ある

と指摘するとともに、本書をはじめ、説法資料に因縁譬喩譚が  
数多く含まれる意義を、

説経に於いて我々が最も興味深く感ずるのは、一座の倦怠  
を除き、睡魔を払はんため、古往今来、和漢梵に亘る因縁

譬喩談を用ゐたことだ。而して此は散怠、覚醒のためのみ  
ではない。教説を布衍し、俚耳に入り易からしめ、信仰を  
誘ふに、恰好の武器であつたのである

と述べた。そして説法資料に含まれる因縁譬喩譚と『今昔物  
語集』などに収録される「説話」を比較しつつ、次のように指  
摘した。

説話文学と説経とは真に皮一重である。今昔や打聞集の類  
は、この方面からも考へねばならぬ

『平家物語』研究において、後藤丹治が唱導（説法）の影響を  
指摘したのも同時期である（前掲書）。筑土の指摘は、日本文  
学研究を方向付けるとともに、日本文学史の領域を拡大するこ  
ととなる。山岸徳平が筑土に呼応して「澄憲とその作品」（  
『山岸徳平著作集Ⅰ』所収、一九七二、初出は『日本諸学研究  
報告』六、一九四二）を発表するなど、説法資料は日本文学研  
究の課題と認識されていく。

一方、櫛田良洪は「金沢文庫藏安居院流の唱導書について」  
（『日本仏教史学』四、一九四二）、「唱導と釈門秘鑑」（『印度  
学仏教学研究』1の1、一九五二）など発表して、神奈川県立  
金沢文庫に保管される説法資料から「安居院流唱導」を伝える  
説法資料を紹介するのみでなく、説法資料を仏教史学や教学研

究の立場から考究した。柳田は唱導の意義を探つて、「唱導と釈門秘論」(前掲)の冒頭に次のように記している。

唱導とは今日の説経、乃至は説法に比せらるべきもので、中世初頭の社会を飾った仏教の一風潮である。中世の人達は之によつて仏教入信の基因となつて、広く庶民と繋がりを生んだものである。それ丈に社会の人達に深い感銘を与へ、期待を以つて迎へられた。確かに中世に唱導と名づくべき一の新興仏教が生まれ、天台でも、真言でもない一の型態を採つてゐた。その説く所は絶待三学思想、法華超入の思想、諸行往生思想にも依り乍ら、時には一向専修弥陀本願思想をも説いて、真俗一貫、信心為本の道理を説かんとしたものである。旧来の型式を打破し、造寺造塔の功德を否定したのではなく、却つて之を肯定して転正の因となし諸行は更に深妙であると説いて専ら欣求浄土への往生を期待せしめんとした。即、唱導は観念理觀の旧来の仏教にも讀し難く、称名念仏の新思想のみをも説くことなく、時と処と、機根を異にして世俗の文字、放言綺語を以つて讚仏乗の転法輪の縁とせんことを目的とした

### 三、現在の研究動向と問題点

ところで「安居院流唱導」に代表されるところの説法さらには説法資料に関する研究を、現在の動向を含めて概観すれば、この領域をめぐる研究が、永井義憲の研究成果と方法論に基づいて進められていることに気付かされる。永井は、筑土による文献資料に依拠した研究を引き継ぎ、『日本仏教文学研究第一集』(一九六六)を上梓して、中国から日本に及ぶ「唱導史」の提示を試みるとともに、清水宥聖と『安居院唱導集上巻』(角川書店、一九七二)を上梓することによって、説法資料の公刊も進めた。永井の研究は、文献資料に依拠することを徹底するものであり、必定、研究対象とする説法(唱導)はテクスト化された範囲に限定されることとなった。永井は、折口が提唱した「唱導文学」とは異なつた概念で研究を進めることを宣言する(『唱導文学史稿』、前掲『日本仏教文学研究第一集』所収)。日本には文献資料が数多く伝えられているが、その伝存状況など明かであるとは言い難い。永井以後、説法ならびに説法資料に関する研究は、新出資料の発掘を期した文献調査を不可欠なものとして、その紹介と、個々の資料を読解することに

終始する。また「唱導文学」あるいは「唱導」の語も、折口が提唱したところを払拭されたまま、弁舌をもって営まれた布教活動全般を含み込む、使い易い語として、研究者ごとに微妙に異なる定義をもって使用されることとなる。近年ようやく、小峯和明が「法会文芸の提唱」（『説話文学研究』三九、二〇〇四）に、「唱導」という語を濫用することに注意を促す。どういった「場」において表白されたか具体的に表現することは重要である。しかし、小峯の提唱する「法会文芸」とは、テキスト化されることが多い、法会における説法（唱導）を研究対象とする。文献資料に依拠することを徹底した、永井の研究成果に発想された提唱であることを読み取らせるのである。種々の場に営まれた説法・唱導は、様々な階層の人々が集う場でもあった。もちろん時代や土地によって、その実態はさまざまであったと推定される。しかし、テキスト化されることのなかった、そういった説法・唱導をも含む「唱導史」を構築することこそ、ひろく日本文化の形成と、人々の意識を辿るうえに有効なのではないだろうか。

日本文学の形成を辿る課題として説法資料を認識することは、筑土から永井へと引き継がれ、多くの日本文学研究者にも通底するに至る。が、説法資料に因縁譬喩譚を内包する意義を明か

した指摘は、日本文学研究さらには仏教教学・仏教史学研究においても、必ずしも筑土が意図したのでない結論を導きつつある。『元亨釈書』に記された「唱導」批判も加わったのだろう。因縁譬喩譚を語ることは「俚耳に入り易からしめ、信仰を誘ふ、狂言綺語であるかに理解されたのである。説法（唱導）をよくした安居院澄憲が、天台教学の研鑽を積んだ学匠として理解されず、また「説法優美」の言をもって称讃された「説法詞」とは因縁や譬喩を豊富に織り込んだもの、言い換えるのであれば、そういった説法こそが、澄憲の説法すなわち「安居院流唱導」であったと評価されてきたのである。日本文学の研究領域において「安居院流唱導」を伝える説法資料が珍重される所以ではあるが、なにゆえに澄憲が「説法の上手」と称されたか、そして「説法詞」が「優美」と称される一端は、承安四年の最勝講における顚末を採り上げて、前章に指摘したとおりである。説法、さらには説法において表白された「説法詞」の評価は、因縁や譬喩を内包する意義も含めて再考されるべきである。

「安居院流唱導」に代表されてきた唱導（説法）、そして「唱導史」をめぐる問題は、日本文学研究のみならず、仏教教学や仏教史学、文化史的環境や歴史的背景をも踏まえた読解をとおして説き明かされていくだろう。学際的な読解を必要とす

することは、研究の進展を遅らせる所以ともなっている。『元亨釈書』に基づいて、鎌倉時代末期に「安居院流」と「三井寺流」の「二家」が「説法・唱導の家」と認識されていたことを指摘したのは筑土だが、いまだにこれが通説とされることを指摘して、筆をおくことにしたい。

以下に翻刻するのは叡山文庫に現在所蔵される『十講卷釈』である。『法華八講』と総称された法華講会が、開・結二経を加えて「十講」構成で営まれた実態を伝える一帖である。本書には、本文と同筆をもって「安居院卷釈 極秘本」と明記されている。しかし実際に「安居院」において編纂され、利用された一帖であるか否かは不明であると言うほかない。本書のように「安居院」の名を冠した説法資料、さらには「安居院作」と明示される文献は数多い。ただし説法上手の名を恣にした澄憲は、上記のような経緯をもって「説法道」を打ち立てる。「安居院」の名を冠すること、さらには「安居院作」と明示する意義は大きい。そういった文献が編纂され、転写を重ねる過程において「安居院作」あるいは「安居院流」と認定されているのは「安居院」ゆえであったと考える。「安居院」において編纂された説法資料の書写と伝播について、いくつかの小稿を提示したことがあるが、いづれの書写あるいは伝播も、流派を

越えて確認し得るとともに、經典を書写する姿勢とは基本的に異なる、利用者（書写した者でもある）の意図するところに基づいて、自由に改変されていることを確認し得るものであった（拙稿「成菩提院所蔵の説法資料について」『仏教文学』三〇、平成十八年 ほか）。以下に翻刻する『十講卷釈』についても「安居院伝説」に裏付けられる、書写と伝播を推想し得るのではないかと考える。

●叡山文庫真如蔵『十講卷釈』（内典 8764216）翻刻

（書誌）柿洪表紙一四・〇×二〇・一

折り紙を仮綴じにした一帖

表紙に「十講卷釈 宝積院行海寄付 実俊」また別筆にて右端に「山門東南浄教房」と記される

（遊び紙一丁）

右端「山門東塔南谷 浄教房 真如蔵 四十八岡」（本文別筆）

無量義経勧請

至心勧請釈迦尊

十方三世諸善逝

一法出生深妙典



八万十二諸聖教

大莊嚴等諸薩埵

身子目連諸賢聖

耆闍崛山中諸聖衆

還念本誓來影向等

此一行初可有之（この一行は行間に書かれる）

安居院卷釈 極秘本

將釈此經有三門分別

初メニ大意者

般若之後法花之前方

便漸ク蕩円機已ニ熟ス

須ク説ク（二）一乗之法ヲ（一）悉ク

授ク（二）八相之記ヲ（一）而ルニ世間ノ

事スラ尚シ有リ（二）表示（一）況ヤ於テ（二）

出世之理寧口無ヲ（二）瑞相乎

依之

先ツ説ヲ（二）序分ノ無量義經ト（一）

後ニ顯正宗一仏乗

方今

現座聽聞之衆ハ暫ク

雖（レ）得ト（二）三法四果之益

後世受持之人ンハ遂

応ル（レ）昇ル（二）七地十地之位ニ（一）

二釈ハ（レ）名ヲ者

從無相之一法（二）出生ス無

量ノ義ヲ（一）故ニ名クル（二）無量義

經ト（二）也

三ニ入文判釈セハ者

三品如ク（レ）次ノ序正流通也謂ユル

初ノ德行品ヲ為シ（二）序分ト（一）次ノ説

法品ヲ為正宗分ト（二）後ノ十

功德品ヲ為流通ト（二）也一經ノ

科文三段若（レ）斯ノ

抑還テ（二）經ノ講肆ニ（一）繁シ（二）文段ニ（一）

且ク其始ノ文如如何

南無無量義經説行品題「……」

一座

八講卷釈 私記

次 神分

妙法講演之場法樂莊嚴

之御為浪受法味証明

功德上界天衆分雲影

向下界龍衆凌波降

臨シ玉フラム然則大梵天王

釈提桓因日月五星諸

宿曜等閻羅王界冥

官冥道司命司祿泰」

山符君殊ニハ円宗守護

山王權現赤山明神等

各各為倍増威光御一

切神分般若心經

大般若經名丁

次法則 次法用

慎敬白大恩教主釈迦

如来証明法華多宝世

尊東土上願伊王薄伽

西方能化弥陀種覺妙」

法蓮花真浄法門八万

十二權実聖教観音

勢至諸大菩薩内秘

外現諸声聞衆惣シテハ尽

空法界ノ一切ノ三宝ノ境界ニ(上)

而言ク方ニ今南浮当会一

結諸徳抽無ニ無三ノ月

祈備一乘八座白善

事其旨趣何者夫

レ

億載僧祇難遇如来之」

教典辟之以浮木之亀

多生曠劫難聞妙法之

梵音測之以優曇之

萼

然今臨此会

誰人乎空修因之志亦

既演此義

何輩乎無得果之謂

就中

琢礼拝供給之鵝珠」

莊一心清浄之道儀

掛優婆提舍之鸞鏡

刷三乘相應之法会

故大法鼓頻響

可憑敬生死之眠

平等雨遍灑

可悅萌仏性之種

事為恒例 啓白詞短

三宝境界 悉知証見

次勸請」

至心勸請 釈迦尊

多宝分身 諸善逝

平等大会 法華經

八万十二 諸聖教

普賢文殊 諸菩薩

身子目連 諸賢聖

梵釈四王 諸護法

靈山界会 諸聖主

還念本誓 来影向

証知証誠 講演事」

至心懺悔 無始来

自他三業 無量罪

今対仏宝前 皆懺悔

我等至心 受三帰

懺悔以前 更不造

帰三宝境 持十善

乃至如来 一実戒

生々世々 無貳

願我生々 見諸仏

世々恒聞 法花經」

恒修不退 菩薩行

疾証無上 大菩提

妙法蓮華經序品第一

大意者

如来秘密之奥蔵也

故二開之不轉

釈迦出世之本懐也

故二聞之甚難

成道四十余年之間

未演真実」

仏寿七拾貳歳之後

始説此經

難遇タリ宿習可説

難聴タリ作仏無疑

題目者

妙者迹本二十之妙法者

界如三千之法蓮花者

法譬兼含之稱經者

聖教之通号序者

次由述品ハ義類同第

一者首次之初

入文判釈者

序正流通三段如常

就第一卷有序品方

便二品自如是我聞

至退座一面通序爾

時世尊四衆圍繞下

別序別序有五方今

補処弥勒替衆会之

疑念問放光奇瑞

覺母文殊引燈明往事

示法花欲説

我見燈明仏本光瑞如此

不聞燈明之音

争散大会之疑念

以是知今仏欲説法花經

自非弥勒之間

誰知妙法之序分

方便品者

有略開三段有広開三段

略開三段三千性相不出

一念広開三段五千上

慢起去一会或挙十

如之妙躰

示諸乘之成仏

或会衆善之小行

帰広大之一乗

一卷両品大概如此

抒講経座々勝業

資奉本尊如々法楽

若爾者

所談四教三觀之奥旨

振已証於花頂荊

溪之春風

所展一乘八座之儀則

瑩供養於天山合浦

之秋月

依之

本地內証之覺花八遍ク

薰于一天垂迹外用之」

慈水遠沾于四海善

願歸本故

乾坤長久 甲乙安寧

仏法興隆 俗諦常住

乃至法界 利益周遍

杼婦卷講始多有文

段且其初文如何

南無妙法蓮華經……

影向神祇云云

問答有論議」

二座 三札等 如常

願我生々云云

妙法蓮華經譬喻品

第三

來意者

上根人者聞法先悟

中下輩者懷迷未達

大悲不息故

拳扇譬真常住之月

巧智無辺故」

動樹調円音教之風

故法訓之次譬説来ル也

題目者

妙法等五字者一部之

惣称八軸之通号也講

釈如第一卷

譬喻者

当品之別称也譬者譬

況喻者曉訓也以世間

父子顯出世門第故名」

譬喻品

入文判釈者

今品題者諸天說偈之

後雖可有火宅喻之前

出經者為調卷置領解

段之初大分為（レ）二初法

說次譬說始法說四

段者領解述成授記

歡喜次譬說四段者

惣譬別譬開譬合」

譬ナリ

方今

上根早悟

雖顯道樹三七箇日之思惟

中根未達

遙指過去二万亿仏

之結縁

是ヲ以テ

儲三車於宅内

先ッ出八苦之煙」

賜大車於門外

終遊四方之風

信解品者

中根之領解段也有法

譬有合譬拳二乘リ

窮子之譬ヲ（二）顯父子之天

性述一代慈父之德示釈

尊之化導宿草庵

昔雖失正觀之月定天

性今方顯無異之露ヲ」

一卷兩品如此

鳴八講金磬

挑三宝珠屣

伏以

内証真如之覺月飛光

常寂空外用心化之

妙花施荷周遍霞

法会既莫太也

納響定丁寧乎

爰以」

一天太平四海靜謐鉄

圍沙界受潤平等利

益

抑歸卷之講始二(一) 文段

繁旦其初文如何

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

影向神祇、、、

三座 三札等 如常

願我生々云云」

妙法蓮華經葉草喻

品第五

來意者

上品者弟子之領解此

品者如來述成領述

有テ(二) 次第上下成來意

題目者

一地一兩是能生能潤

三草二木是所生所

潤也此中述成中草」

領解ヲ(一) 故挙テ(二) 葉草ヲ(二)

別為品題

入文判釈者

當卷有り(二) 三品初品中

根述成段文ニ分為二

爾時世尊下略述成

迦葉當知下広述成ナリ

方今

桜梅桃李之並枝皆

生真如之大地ヨリ(二)」

紫蘭黃菊之交也悉潤

実相之雲雨

草木譬五乘之不同地雨

類一実之無差無始性惡

如地釈論(一) 法性源專在

妙法ニ(二) 不以余教為種定

下成仏種独仰今經ヲ(二)

授記品者

中根授記段也

初二ハ迦葉一人預當作仏ノ」

記後自余三人蒙成正

覚荊ヲ(一)

迦葉偏真之袂

薰瞻蔔之奇香

善吉一鉢之器

湛醍醐之珍膳

化城喻品者

第三周正說段也

文分為二一二八者明知見久遠

二述宿世結緣」

明三千塵点之結緣

顯シ（二）往因於大通

說五百由旬之宝所

儲化城於中路

十方梵王請半滿之法

輪十六沙弥講円頓ノ

一実

一卷諸品略釈如此

抑扇優婆提舍之梵

風顯神明仏陀之朗月」

既是三業相応道儀

豈亦六趣輪廻ノ累繼ナラン

故本尊等妙二覺之馴

輪弥ヨ潔

諸徳真俗二諦之榮

花増馥

伏乞

天下風収 海内波閑

莊蘭露温 田畠雨周

抑帰卷之始有文段且ク」

其初文如何

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

四座 三礼等 如常

願我生々云云

妙法蓮華經五百弟子授記

品第八」

来意者

上品明下種結縁因此品

説授記作仏果

因果有次第上下成来

意



題目者

雖記千二百別題五百品

五百得記名同五百領

解不異故

入文判釈者

文有兩段得記兩解

付得記 先記滿願

次記千二百 記滿願者

內秘菩薩之行雖示本

地之妙外二八現声聞相

常呈懸何之勝

方今

五百声聞轉次作仏

如春花漸次開

二千羅漢同時成道」

似曉星河漢烈

人記品者

侍者阿難 仏子羅云

俗中甚重 真中尤勝

二人漏記 一会懷疑

因茲

阿難名山海惠

羅云ヲ号七宝華

法師品者

一句一偈一念之隨喜速」

預菩提之記已說今當說

之諸經遙顯妙法之勝

宝塔品者

二仏如星耀

釈迦多宝無替

四衆踏雲坐

凡夫賢聖難弁

十方分身集樹下

眼窮四百万億塵

兩足尊容並塔中」

望繫二百由旬空

一卷諸品梗概若斯

論談決択者仏乘輶轄

演之備宝所

問答往覆者法門樞鍵

調之資法衆

功德有余慶

納受可周備依之

君遊長生殿

巨事不老門仏法」

王法榮久

伴竈鶴覺道政道齡

賢准松竹

伏乞

天長地久普界平等

抑婦卷始文段繁且其

初文如何

南無妙法蓮華經云云

五座 三礼等 如常

願我生々云云

妙法蓮華經提婆達多品

第十二

来意者

引古弘經明今演化拳

昔勸今故此品来ルナリ

題目者

妙法等五字者一部惣

称八軸通号也提婆達」

多者翻云天熱此人可

造五逆故生ル時人天熱

惱故得名

入文判釈者

初明達多之弘經釈尊ノ

成道次述文殊之通

経龍女之作仏

方今

五逆調達

臥阿鼻得記崩

八歳龍女

捧明珠詣靈山

酌寒谷之月

夜々苦呈受法之切

拾暮山之雲

日々專抽供給之誠

遮多劫之凝冰於智積

仰無垢之風散五障

之蒙霧於身子拜八

相之光ヲ（二）

勸持品者

二万菩薩此土弘經八

千声他土流通

安樂行品者

文殊開章門勸始行

如來設方軌教安樂

涌出品者

弥勒執近情拳疑問

釈尊思テ（二）遠本ヲ（二）示所化

一卷諸品大概如斯」

磨軸々金文ヲ（一）顯心水澄

潔写本尊之真影連

卷々玉札倍惠日耀

暉弘遮障之妄雲

于茲

北野聖廟三業相應ノ

之白善無始論談靈

勅最可仰之

南都鎮守諸善根中央

摂第一破邪顯正統惠」

命故神託最可信之

視夫

金殿燈明赫奕

大聖之威光弥巍

壇上供花碧鮮

諸德之異香增芬

嗚呼

在世護法之昔二八四種天

花散如來之上

今日講經之時信伏散花」

滿梵筵之砌

以景色自然

知感応無疑

然則

依報正報紹隆

飽協扶桑開闢之

索懷

真諦俗諦繁興快応

和風神國之冥慮

功德有余故」

一天風穩凶塵永斂

四海波平逆浪止響

善根無限故鍊圜悉

仰神明之明德沙界

濟歸仏法之法力

抑歸卷講始有文段

且其初文如何

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

六座 三札 如常」

妙法蓮華經如來寿量

品第十六

來意者

上品者本門之序分此

品者本門之正説

題目者

妙法等五字者講釈

如初別号者発迹

顯本秘密神通之

三身謂是如來ト(一)」

円融法界常住不滅之

惠命名ク(二)是ヲ寿量

如來者諸仏之通号

寿量者功德之詮量

入文判釈者

文分為二先誠次正答

正答中有長行有偈

頌有法説有譬説

方今

一身三身之内証常住」

寿量霜是遥

非生現生之外用機感

相應月久晴

為失心子暫遊他國為

救世父常在靈山

分別品者

明一念信解之功德

隨喜品者

述五十展轉之勝利

法師功德品者」

依五種法師之修行得

六根清淨之果報

一卷諸品略釈如斯

杼捧開講座々勝業

資本尊会々法案

凡ソ夫

尋本本高

実成之月遥隔塵点之霞

訪迹々広

利物之花遍開粟散之苑」

爰ニ吾等

漏如來在世之化導為常

没凡夫

是雖恨中之恨

烈常在靈山之住侶ニ（一）円

乘禪徒

豈非スヤ（二）喜中之喜ニ（二）

可想

自本地真因之昔遠ク

鑑今日垂迹之機事」

可憑

以和光同塵之始即期

八相成道之終事

重乞

地主ハ持丁令威之駕鶴

長生之年齡

諸德吞陶安公之乘

龍不老之掌露

依法正法 常演妙法

己世他界 広作仏事」

杼返卷始文段繁且其

初文如何

波妙法蓮華経云云

七座 三礼等 如常

願我生々云云

妙法蓮華經常不輕菩薩

品第二十

來意者」

上品者說依五種之行得

六根之果

今品者証引不輕之事

叶相似之位

故上品次此品來也

題目者

妙法等五字一部通号

不輕菩薩者釈尊昔

名也威音王仏像法之時

心信衆生之仏性」

身立礼拝之一行

昔毀者以之名人

今經家以之為題

入文判釈者

一 双指前品罪福

二 双開今品信毀三得名也

方今

上慢四衆之輕毀

雖咽千劫阿鼻之煙

中道一実之逆縁」

還澄六根清浄之水

神力品者

明十種之神力

属累品者

演三摩之付属

藥王品者

如說修行人紫台西裝

妙音品者

浄光莊嚴土

白毫ヲ東照ス」

一卷諸品大略若斯

累座々論席理崛霧

晴覺月忽可顯調巍

々法味或器水湛心玉

速可取

化功帰已故相將之家

文武之職嘯還源之笙歌

豎者之督講匠之役遊

好世之宝祿

重乞」

一天泰平弘旱水風患

之災殍（イナ）万民快樂飽

粟稼果実の豊稔并

入來聽聞之衆聳不

老不死之妙藥烈座講

經之僧袈髻珠頂珠

於衣裏

抒返卷始有文段其初文如何

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經」

八座結願之法用

八座開講場從文殊欲

說之初至普賢勸發

之後所降臨影向天衆

地祇重為法樂莊嚴

倍增威光一切神分般

若心經丁

大般若經名丁

願我生々云云

妙法蓮華經勸化觀世音御苦」

薩普門品第二十五

來意者

上品者明東方大士之弘

經此品者述西方菩薩

之化他東西有次第上

下成來意

題目者

觀世音者大悲被苦

百千万億之苦皆得解

脫普門者大慈与樂」

世間出世之樂悉ク令滿足

惣有十双五隻之尺具二ハ

如疏文

入文判釈者

文ニ有リ（二）兩番之間答初問

答之中ニハ明ス冥之利益三

毒七難皆離二求兩願

悉滿後問答中說顯ノ

之力用目視三十三身

尊容耳聞一十九種說教」

方今

普現三昧之秋月

浮影於感応之水

濟生利物之春花

施苟無畏之露

陀羅尼品者

明五番之神咒

嚴王品者

說四聖之前縁

勸発品者」

以四要之方軌

顯一乘之再演

一卷請品大旨如斯

鳴妙法之論鼓

覺有執昏暗之眠

扣仏乗之疑関

挑無相莊嚴之扉

就中

地藏薩埵之靈台者

聳忉利之雲照二仏中間長夜」

普賢大士之恵日者

凌宝威之霞耀十善外

外用之旦夕

依之

円頓上乘之春花送苟

遠沾妙道之風

真如中道之秋露添濕

於濁世澆末之流

放

導有縁無縁悲願呈四弘」

六度志於同塵質

救有罪無罪慈愍示三身

七善誠於和光粧

若然者

神明仏陀 薩埵聖衆

化導覆一天

雲行雨之靈德無傾



威光弥四海

顯教密教之興與行無意

重乞」

法主之運祿百千萬端

繫屬結緣之花袖久々烈

諸德宝竿

尽未来際

營歟 先途後榮之香衣倍

苟

抑返当卷之初文段繁

且其初文如何

南無妙法蓮華經 云云

南無妙法蓮華經影向神祇增威光

(遊び紙一丁)」

普賢經勸請

至心勸請釈迦尊

多宝分身諸善逝

一実境界甚妙典

八万十二諸聖教

普賢文殊諸薩埵

身子目連諸賢聖

重閣講堂諸聖衆

還念本誓来影向等

仏説觀普賢菩薩行法經」

初大意者

法華一実之結經

本迹二門詮要也

鷲峯八年之本懷既

遂靄林二月之涅槃

在リ(レ)近ニ

先在(二)多宝塔婆之裏ニ(二)

且ク云フ(一)如來不久当入涅槃ト(二)

後ニハ住シテ(二)重閣講堂之中ニ(二)

重テ告(二)却後三月当涅槃」

槃一会大衆驚シ(レ)聞ヲ菩

薩声聞為(レ)悲ヲ問一

実境界之思惟ヲ(一)尋ヌ(二)

六根懺悔之方法ヲ(二)是其

大意也

題目者

仏ト者万徳之世尊説ト者

八音ノ之声教観ト者能

観之智普賢菩薩ト

者所観ト境也行法者」

懺悔之方軌経ト者聖

教ノ都名也

入文判釈者

従如是我聞至而能得

見ニ（一）序分従仏告阿難

至第五懺悔ニ（二）正説分仏

告阿難於未来世ト云ヨリ以

下ハ勸喜奉行也一経畢」

（遊び紙一丁）」

（裏表紙）」

※叡山文庫には、ここに翻刻する『十講卷釈』の伝本として次の一本を伝えている。

無動寺蔵 130911899

墨流し表紙 右上に「子廿七」・「沙門真超」の方朱印・「山

門無動寺蔵」の方墨印

（二丁）「十講卷釈」・右下に「桑門」・左下に「民部卿」（ともに本文同筆）

綴葉装一八・四×一三・〇

折り紙を綴葉装

なお、翻刻するにあたっては、一・二点、レ点などの返点は

（一）丸括弧をもって表記した。

貴重な聖教の翻刻を許可下さった叡山文庫に深く御礼申し上げます。

ます。

（おおしま かおる／本学教授）